岐阜経済大学論集 30 巻 4 号（1997 年）

フォークナーとインディアン (3)：「求愛」をめぐって

山　田　冨　貴

I am ashes where once I was fire.
Lord Byron

この作品は，若き日のイッケモチュッベと白人の水先案内人デビッド・ホーガンベックとの間で繰り広げられた，美しい娘（スリー・バスケットの妹）をめぐる恋の鞘当てを「主題」とする。最初にこの物語を語ったのは，物語の中の出来事に直接関与した，部族の中のイッケモチュッベと親しかったある人物であり，その息子が，父親から聞いた話として語る，というのが作品全体の語りの仕組みである。いささか「回りくどい」体裁をとった物語（a narrative）であると言える。作品の中味は，ギリシャ古典のパロディーやバイロンの詩句のもじり，あるいは，トール・テールの語り口などの導入によって，多彩な描写がなされている。と同時に，昔話や民話の語り口に見られる緩慢な時の流れと心地よく折り合うようなテーマ，――友愛，正義，公正，敗北の承認，等――が教訓的に盛り込まれている。であるから，それなりに語るに値する，とひとまず言いきることはできる。他のインディアンを扱った短編（「赤い葉」，「見よ！」「正義」）が，文明の波に洗われ，それとの格闘をしいられる，あるいは，自ら退廃の道をたどることになるという宿命が，主題として盛り込まれているのに比べ，「求愛」はイッケモチュッベがインディアンとして生き，作中，再三繰り返される言葉，「イッケモチュッベがただ

イッケモチュッベであった」[1]ときの，つまりは「人間が堕落する以前の(pre-lapsalian) 世界」[2]を描いている。そう読んだとしても，それほど一面的な読み方だ，という訳でもないだろう。

しかしながら，本稿の関心は，インディアンの部族の中の誰か（それが誰であるかを特定することにはこだわらないが）と思われる語り手が紡ぎだした「昔の世界」が，（実は）何についての「話」であり，それが何の目的のために語られなければならなかったかに向けられる。語りは，「昔はこんな風だったよ。(This is how it was in the old days.)」(361)，という前口上で始まり，「そんな風だったな，昔の話よ。(That is how it was in the old days.)」(380) で終わる。が，語り手の「昔 (in old days)」に向けられた眼差しは，必ずしも「昔話」を昔の中に封印しようとするそれではなく，逆に，「人種を超えて魂が美しく触れ合う様」というような清々しい中味について語っているにも拘わらず，それとは反対の方向に向けられているような感がある。美しい物語がありました，と言ったとほぼ同時に，そんなものはあろうはずもない，と打ち消しているかのようでもある。例えば，F. Cantrell は，in old days を字義通り「昔」とだけ読めばいいと考え，イッケモチュッベというインディアンの若者を，「この作品だけで完結した全体」[3]として見て，その純粋で高潔な魂を讃えている。前述のとおり，それ自体は否定できないだろうが，その場合は，語り手がどのような位置から物語を語ったか，については考慮していない。語り手が「物語」と向かい合っている距離，あるいは位置を問題としたとき，完結しているはずの「昔」へのかすかな疑義が生まれ，やがてそれが広がる。「今」の意識は往々にして「昔」への過度な賛美となりがちだが，この「物語」の語り手は，「昔」と「今」の対比を意識化することで，それが，修復不能な物語の崩壊へと，美しかったはずの「昔」が，違う何かへとずらされていくのを感じているかのようである。

I

最初に「物語」の概念把握について，若干触れておきたい。物語は，テクスト（シニフィアン・言表）から抽出されるものであり，概ね時間的・因果論的に継起（sequence）する出来事（event）によって構成される。しかし，継起の仕方については一様でなく，連鎖・反復・対立等様々であり，継起の幻想もまた継起の中に包合される。物語の確かな認識は，テクストを「要約（paraphrase）」することに基づき，「要約」は一々の出来事に分類（event-labelling）を与えることによって成立する[4]。要するに，物語はどういう単位からなるのかというと，「出来事」であり，そこで考慮すべきは，出来事の間に生ずる関係性である。J. Hillis Miller の説明によれば，われわれがどうして飽くことなく「物語」を必要とするかという問題を設定したとき，「テーマ」，「メッセージ」，あるいは「モラル」といった，あらかじめ「物語」に対して用意された枠組みに依拠しているからではなく，出来事の連続する構造こそが，われわれの物語への欲求を充足しているのだ，となり，構造主義的・記号論的観点からすれば，物語とは，すでに起こったこと，あるいはすでに起こったとみなされていることを秩序づけ，秩序づけなおし，物語りなおす過程ということになるだろう[5]。

まずは「語り手」の，物語との関係の中で占めている位置を確認しておこう。語り手は物語の出来事を直接に目撃した，あるいは，出来事の場面に居合わせたということは考えられず，出来事との関連からすれば，出来事に関わったのは「語り手」の父親であり，父親は，いわば当事者として，出来事の登場人物として出来事に関わったのだ。だから「語り手」は父親から出来事について聞いた，と考えるのがもっとも自然であり，「語り手」の出来事に対する距離を言う際には，出来事には間接的に関わった，あるいは，間接的にしか関わってない，という言い方ができよう。そして，ここには二つの

物語，父の語った物語［S_1］と語り手が語った物語［S_2］とが事実上存在する（それに語り手が，父親以外から聞いた話［S_0］も別途考えることが可能だが）ということになる。S_1 と S_2 との相互関係について考えてみる。その組み合わせはつぎの通りである。$S_1 = S_2$，すなわち，語り手が父親の語った内容通りに語った。それは語られた内容に関して，父親の認識と価値観をそのまま継続した，ということを暗に意味する。$S_1 > S_2$，すなわち父親の話の一部だけを語り手は取捨して語った。それは，語られた内容の不必要な部分を切り捨てた，ということであり，父親の側の判断に基づいた，聞きたくもない部分（＝聞いて後，語り継ぐ必要のない部分）がどこかにあったと解するのが自然である。$S_1 < S_2$，すなわち，聞いて後これを「語りなおす」ことが必要だと感じた。ここでは，父親の認識が「誤り」であったという判断には必ずしも立っていないが，父親の認識を超える，拡大された「出来事」を掌握する地点に語り手がたったと考えることはできる。言い換えれば，父親の語った「出来事」は「起こったとみなされた出来事」であり，語りなおすことが要請されていた，と考えられる。

前二者は基本において父親の（語った）物語という枠の中で考えることができよう。$S_1 = S_2$ は，「同じ話」を語り継ぐこと（＝繰り返すこと）の要請そのものである。それは，ある種の部族的に共通の価値，あるいは理念を強調し，意味を強化，持続させていくことが本来の目的となろう。その意味で，語る行為としてはもっとも自然であり，本来的である，と言ってよい。$S_1 > S_2$ の場合は，まったく父親の語った通りに語り手が語っていない。その限りにおいては，語りなおしてはいるものの，ここでも一定の部族的価値を語り継ぐ，という要請に支えられている。一定の語り継ぐべき価値とは，「昔」のごとくあれかしと願う恒久的で，部族的に共有されている価値のことであり，具体的には若き日のイッケモチュッベが具現していた，公正，正義，友愛，といった美質を指す。しかし，$S_1 < S_2$ の場合はいかに考えるべきか。そこにおける語りなおすべき要請，とは何だったか。それはイッケモチュッ

べという一人の若者が，イッケモチュッベ／ドゥームという，二つの人格に分離，あるいは，分裂，対立していることをどう認識するかに関わってこよう。イッケモチュッベはもはや存在していなくて，ドゥームが存在することそれ自体が問題とされるのだろうか。となれば，それは前二者とは逆に，一定の語り継ぐべき「物語」が消失したという認識のもとに語っている，ということにもなる。$S_1 = S_2$ においては，イッケモチュッベはあくまでイッケモチュッベであった。$S_1 > S_2$ にあっては，イッケモチュッベの中のドゥームはその背後に隠され，否定的な形でのみ存在する。$S_1 < S_2$ にあっては，ドゥームが物語全体に大きな影を投げかけている，あるいは少し読み方をずらしてみると，ドゥームこそが語る対象として存在する，とも解釈できる。

以上の三つのケースを語り手の位置について考えてみる。このうちのどれという特定をすることはできないが，そのうちのいずれかでもある，という判断は下せよう。つぎに物語における出来事の分類（event-labelling）を試みてみる。

II

テクスト全体は，父親が子に語った出来事として，概ね以下のような要約（I～VI）から構成される物語であると，解することができよう。

酋長イッセティッベッハの甥，イッケモチュッベと蒸気船の水先案内人デビッド・ホーガンベックはスリーバスケットの妹に恋心を抱いた（I）。二人は，それに勝利した者が求愛する資格をもつという取り決めの下にコンテストを行なった（コンテストの逐一はこの出来事の中に含まれるので省略する）（II）。最終的な決着を求め，二人は危険な洞窟までマラソンを行ない，先に着いた方が洞窟の中でピストルを発砲し無事出てきた者を勝者と決める（III）。ログ・イン・ザ・クリークがスリーバスケットの妹の心をとらえ，二人が留守の間に結婚する（IV）。二人は傷心のままニュー・オリンズへとプランテーションを

離れる（V）。イッケモチュッベはドゥームと名を変え再びプランテーションにまいもどり，酋長として支配を行なう（VI）。

要約 I～III は，これを「昔の話」と規定したとき，$S_1 = S_2$ という関係性がもっともよくあてはまり，物語全体の語りの中心（the first narrative）をなすとみなすことができる。要約 IV～VI は物語が暗転する方向に向かう。最後の VI に関しては，語り手の語る意図に関連して，物語の中でどのように位置づけるべきかは，考慮すべき点である。最初の語り手（父親）に比して，第二の語り手（子）によるこの部分（ドゥームについての要約）の再現に関しては，最初の語り手から直接聞いたものであると仮定するとしても，「より多くの詳細を，またより多くの直接的な仕方で」[6]読み手に提供している。そういう意味で，この部分は，語り手だけが知覚（perception）し，独自に言語化した（すなわち $S_1 < S_2$）ものだ，と考える方が自然だ。テクストの時間そのものは一方向的に I→VI へと線的に向かい，かつ不可逆的であるが，物語の時間は一定の運動方向をとることはなく，その出来事の継起する順序は，線的に進行してはいない[7]。そして，VI の部分（ドゥームについての要約）はいわば語りの中の「落ち」なのだが，語り手はこの部分は，前説法（prolepses）の形で，語りの冒頭に，そして結末にと，二度にわたって繰り返している。出来事を繰り返すことで，「語り手」によってのみ知覚された「物語」の所在が明示され，「出来事とみなされている出来事」をいかに語りなおすか，という「語り手」の意図を見てとることができる。

整理してみる。繰り返しになるが，イッケモチュッベがドゥームに名を変えたことは物語言説（何を語ろうとしているか）を規定する上で鍵になる。具体的には，最初の語り手と二番目の語り手がイッケモチュッベの変化をどのように認識していたか，それによって，イッケモチュッベとドゥームが別個の人格と考えるのか（イッケモチュッベ不連続説），あるいは同質的一個の人格（イッケモチュッベ連続説）とみなすのか，いずれかに分れる。さらに，どこに語りの焦点を置くか，イッケモチュッベがイッケモチュッベであったこと

（語りの中間部）であるのか，イッケモチュッベがドゥームになったこと（物語の結末部）なのか。語る者と語り継ぐ者の分岐点（敢えて「対立」とは言わないが）がここにある。

III

出来事に関与して，「語り手」自らが（自分の言葉で）語りつないでいった部分を以下に引用してみる。しかし，語り手の「自らの言葉」というのは，同時にこれが他人（父親）の言葉でもあることに留意しなければならない。バフチンによれば，「他人の言葉――これは言葉の中の言葉であり，発話の中の発話です。しかし同時に言葉についての言葉，発話についての発話でもあり」[8]ということになるからだ。

引用(1)　（これは昔の話だ，……）部族の者は今はみなプランテーションで暮らしていた（The People all lived in Plantation now）。イッセティッベッハとジャクソン将軍が会見し，互いに武器を捨てて和解し，森林の中に境界線を引いた。……（361）

引用(2)　イッセティッベッハはすっかり老人になってしまったので，もうただ日なたに座って，部族が堕落し，政治家は愚劣で貪欲で，こんなに神さまが苦労して人間が苦労しない国は聞いたことがないぞと批判するばかりになって，……白人が自分の領地でそんなばかな規則を作りたがったって，おれたちはかまわない（it was all right with us）。（362）

引用(3)　日が過ぎ，月が過ぎ，それから洪水が三度あって，老イッセティッベッハが死んで一年経って彼の息子のモッケチュッベが酋長になったところでイッケモチュッベが帰ってきた。この時は名前をドゥームと変えて，シュヴァリエ・ド・スールブロンド・ヴィトリーという白人の友人と八人の新しい奴隷を連れてきたが，こんなものもおれたちには不要なものだったな（the eight new

slaves which we did not need either)。……だけどこの話のときはまだドゥームになっていない。ただのイッケモチュッベ，若者の一人，最高の男，馬に乗っての激しさ，早さも一番，踊っても一番，酔っ払うのも一番，愛されるのも一番だ。(363)

引用(4)　イッケモチュッベが彼女を見てからは，おれのおやじも，夜のふくろうもシルヴェスタのジョンも，他の青年たちも目をそらした（my father and Owl-by-Night and Sylvester's John looked away)。(363)

引用(5)　間もなくイッケモチュッベは完全に行ってしまって，ずいぶん経ってからドゥームという名に変わって帰ってきたのだ。一緒に新しい白人の友人が来て，こいつは誰も好きになりたいとも思わない男だったし，あと八人，奴隷も一緒だったが，おれもおれたちには用のないものだった。……その他何によらずドゥームと彼の間に入る邪魔を死なせてしまうことになる。しかし，彼はまだそこまで行っていなかった（But he was not quite gone yet)。まだ，ただのイッケモチュッベだった（He was just Ikkemotubbe yet)。青年たちの一人だった。愛したけれども愛し返されることのない青年たちの一人，言葉を耳にし，事実が見えながら，その前にいた青年同様，また，その後に来るであろう青年同様，なおその意味が理解できない青年たちの一人に過ぎなかったのだ。(379)（いずれも傍点筆者）

引用(1)は，語りを始めるにあたって，「時代」をとりまく状況を説明しようとする。しかし，そうでありながら，逆にいかなる状況であるのか，把握するのに戸惑うような，いくつか曖昧な要素がここにはある。例えば「部族の者はいまはみな，プランテーションで暮らしている」という出だしの文章を取り出してみる。これは，自由間接話法（free indirect discourse）の形であり，He said と接続詞の that が共に消去されている[9]。つまり，形式上は，直接的な引用の構造のようでもあり，また，間接的に語り手の側が自らの言葉に置き換えたようでもある。この言表（speech representation）は，直接話法（mimesis）と間接話法（deigesis）が結合したものであり，発話の基本構

造に，それと代替可能な構造が同時に作動する形態である。別言すれば，聞いた話（他人の言葉）の引用は，そのまま，自らの発話のテーマの中に入り込んでいる状態，と言ってもよい[10]。それは，結果において両義的な効果（double-edged effect）を生み，テクストの意味を濃厚にしていく（semantic density of text）ことになる。さらに，「異なる部分が最終的に特定の語り手に帰着されるときですら，あるいは，そうでないときはなおさらだが，自由間接話法は，語り手の態度の多重性を劇化することで，テクストの声の二重性（bivocality）あるいは声の多層性（polivocality）を高める」[11]という自由間接話法のもつ機能のひとつに着目してみる。子が父親から語られた話の中味をそのまま子が語る（$S_1 = S_2$）のであるとしても，その場合，語り手の数は複数であり，また，子が語る行為は，父親のそれに比べ，昔－今が作りだす隔たりによって「アイロニックな距離」の下にあると考えられる。ならば，同じ物語内容でありながら，そこには，二人の語り手が，異なる「声」でもって，対話的に語っていることになり，対立的な声と声とが同時に交響しているということになるのだ。そこにおいて，曖昧な意味の二重性，あるいは多重性が生みだされていると解釈できる。自由間接話法は作中の語りにおいてそのような効果を生んでいるが，それはそのまま「語り手」における語りのテーマだと言ってもさしつかえない。

曖昧さについて，さらに見ていこう。「いまは（now）」というのはいつのことなのか，「プランテーション」で暮らすというのは，具体的な歴史のコンテクストの中で何を示唆し，読者は何と解すればよいのだろうか。こうした曖昧さは，要するに物語の中で対立する，物語の「現在」と語りの「現在」とが微妙に混乱していることに起因している。now の直示性は，物語の中の時間（「その頃」）と一致しているようにも見え，したがって，父親の肉声として語りかけている（direct discourse）ような錯覚がある。しかし，引用(4)で，「おれのおやじ（my father）」とあるので，これは一貫して「語り手」の声でなければならない。一方で，「今」という直示が，これが語り手の語

りの中の「時間」であるという意識につながっている。こうした「混乱」は，語り手の中の現在と昔との間にある，意識の混濁であり，それが時に自ら父親の視点から出来事を語っているような錯覚を生んでいる。引用(2)(3)における「おれたち（we）」もまた，昔と今が錯綜した形をとっており，昔の部族と今のそれとの間に断絶はなく，昔－今が連続する（あるいは，昔と今とが対立しない）部族集団全体を総称している，と解することができる。であるから，引用(3)は「おれたちはそんなものは必要でなかった」という文の正確な解釈は，「昔のおれたちが（奇妙な言い方だが）そうであったように，今のおれたちも必要としない」となる。

そして，「プランテーション」とは何かという考察に移ろう。コロンブスの「発見」以来，ヨーロッパ文明は400年にわたって地表の大部分を植民地とした。その過程で，「新世界」と称される，「富」を産みだすために人工的に組織された「企業」が形成され，少数白人が大量の奴隷を使役して商品作物をヨーロッパの市場に送りだす，というシステムが，この「世界」を構成する基軸となる。このシステムが「プランテーション」である[12)]。基本的な歴史解釈に基づいて言えばそうなるが，そこから様々な意味が引き出される。それは，欲望の無限定な拡大を承認させていくことであったり，所有の観念を，例えば土地を介して，より具体化していくことであったり，開拓という名の下での反－自然的，あるいは破壊的な略奪行為を正当化することであったりした。ついでに言えば，このようなヨーロッパによる世界規模での，「未開」地域，あるいは原住文化への経済的，文化的侵略は，いまだ存在したことのない文化のハイブリッド（混成化）を実現し，「クレーオール（原義は creat）」というきわめて人工的で，夥しい多様性を秘めた社会，文化を産み落していった。だから，「新世界」においては，異なる文化が様々な局面で，出会い，交差する場，異文化のクロス・ロードが無数に存在していた，と想像してみることが可能なのだ。

作品中の「プランテーション」について，二つの解釈を試みてみる。ひと

つは，デビッド・ホーガンベックとイッケモチュッベという，白人／インディアン，双方の文化が「調和的」に均衡していた世界と結びつけて，もうひとつは，イッケモチュッベがドゥームへと変貌していった世界と結びつけて考えてみる。前者について言えば，二つの文化が出会ったとき，いきなり殺しあいを始めた訳ではなく，どれほどか政治的かけ引きがあったにせよ，互いの文化の交流は確かにあった。チカソ族が黒人奴隷を所有していたことは歴史上の事実[13]であり，引用(3)の「八人の新しい奴隷」から，古い奴隷がいたことが示唆され，「プランテーション」では奴隷を使役することで何らかの生産活動が試みられていた。しかし，そのことから類推して，「部族の者たちはプランテーションで暮らしていた」という言い方が，すぐさま「白人のように暮らしていた」，という解釈につながることはない。だから，ある種の技術供与のような互恵関係に基づく「おだやかな」文化の混成があったことの示唆である，と「プランテーション」を解釈すればよい。後者の場合は，前者とは対極に位置することになる。イッケモチュッベが黒人奴隷を連れて，いかにも植民者的，詐欺師的で，いかがわしい名前のフランス人（Sœur-Blonde de Vitry）と共にニュー・オリンズという爛熟した文化都市から「プランテーション」に帰還して以後，文明により退廃し，引用(2)においてイッセティッベッハが慨嘆するような，まさに白人支配文化に追随するものの象徴として「プランテーション」を解することができよう。この二つの「プランテーション」は語り手の中の空間に，昔－今をめぐる対立として混在している。同時に，語り手も意味的に引き裂かれた「プランテーション」で暮らしているのである。

こうした曖昧さが生まれること（あるいは作為的に曖昧が装われていること）からくみ取るべきは，語り継ぐことが，表向きの「継承」と同時にその深層における「語りなおし」という行為を同時に求められるということだ。「語り継ぐ」とは本来，「語りなおさない」ことであるにも拘わらず。

IV

最後に，ではなぜ語り手にとって語る（あるいは語りなおす）行為が必要だったと考えられたのか，必要であるのは，どんな事柄を伝え，どのような「世界」を再＝現前化（ルプレザンタシヨン）するためだったのか。それについて，語り手の中に父親の語った物語の継承性（$S_1 = S_2$）がいかほどあるのかを検討してみる。

語り手が語りの場面を離れ，わざわざ「父親が言った」と断っている部分は以下のようである。しかし，必ずしもこう断らなくても父親から聞いたのは当然であるとすれば，父親の言葉として伝える必要がある場合に限ってことさら（ある含みをもって）書き添えられた，と考えるのが自然である。

引用(6)　……今度はまた微笑しているのだとおやじは言ったものだ。まるで長距離競争の終わりごろ，青年たちに彼の走り続けることが分かっていて，それは彼がまだ生きているからではなく，彼がイッケモチュッベだから走り続けるのだというあの感じの微笑だったと。(373)

引用(7)　話がここへ来ると，おれのおやじは言った（And my father said how . . .）。みんなイッケモチュッベが好きだったけれど，このときのデビッド・ホーガンベックはじつによかったって。……この時代には男がいたんだ。(because there were men in those days.)（373）

引用(8)　そのとき，再びイッケモチュッベはデビッド・ホーガンベックに向かって微笑みかけたとおれのおやじは言った。(my father said how . . .)（374）

引用(6)〜(8)の中味は，イッケモチュッベがイッケモチュッベであったこと（引用(6)），昔は，確かにイッケモチュッベやデビッド・ホーガンベックのような男らしい男がいたこと，そしてここにおいては「この時代〔＝昔〕(in those days)」の所に強調が置かれていること（引用(7)），そして，イッケモチュッベ

はいつの時にも相手に対する敵愾心というものをもたず，「微笑み」を浮かべていたこと（引用(8)），である。これらに共通するのは，語るに値する人間の崇高さと，それが厳然たる事実としてかつて存在したこと，である。「おやじが言った」と，わざわざ語り手が断り書きをいれたその真意をさぐれば，「言った」という言葉は，そのまま，「どうしても言い伝えておきたかった」，「あるいは（イッケモチュッベについて）本当に語り伝えておきたかった」，という具合に置き換えてみることができよう。イッケモチュッベがドゥームに変貌したことを父親が知っていたとしても（おそらく知っていた可能性は高いが），「イッケモチュッベがただのイッケモチュッベである」（引用(5)）ことで，父親の「物語」は完結していた。語り継いでも詮無いこととして切り捨てた部分（$S_1 > S_2$）が，ドゥームであったのだ。父親はイッケモチュッベ不連続説であり，その論理構造は，「イッケモチュッベはドゥームとなったけれども，イッケモチュッベはイッケモチュッベだった」となる。美しい昔の物語を伝える，そのことが，いささかのアイロニーも交えず，ただただ人間の営み（＝物語構造）にとって大切な事柄だと信じた。

一般論として，人間は，個人であれ集団であれ，「物語」を必要とする。一個の人間が，あるいは集団が，かつてどこから来て，今どこに位置し，そしてこれからどこへ行こうとしているのか，こういうことの確認を常に迫られているからには，人間は一定の「物語」に依拠せざるを得ない。それが，個人の誕生から死に至る人生という「物語」であれ，国家の成立をめぐる歴史という「物語」であれ，宗教に見る神話という「物語」であれ，どういうものであれ，物語が必要とされる主たる理由である。

語り手は，個人として，あるいはインディアンの部族（集団）として，聞き置き，語り継ぐべき物語があることの重要性を一方で語った。それは，イッケモチュッベがデビッド・ホーガンベックとの間に繰り広げた（互いに平等な）男同士の「友愛の物語」であった。いささか誇張を交え，あるいは交え過ぎて，「嘘」のようにも響くとしても，そのようなものだからこそ，相

互に共有することのできる「話」として値打ちがあることを語り手は認識している。と同時に，そういうものがないこと，すなわち物語の空白がもたらす，ある崩壊につながる，根源的な不安を一方で語った，と言ってよい。結論を急げば，語り手が語る行為の目的はその両者が等価にもつ，人間にとって背中合わせの意味についてであった。一方で，「おやじが言った」言葉の重みを感じながら，今という地点から，言葉の手応えが次第に消えていくのを感じている。すなわち，懸命に「昔」を「今」に手繰り寄せようとしながら，「今」に裏切られるのである。語り手の語るスタンスは，まさにそこにあり，その論理構造は，「イッケモチュッベはイッケモチュッベであったけれども，イッケモチュッベはドゥームになった」，ということだ。先の引用(3)と(5)において，「イッケモチュッベがイッケモチュッベだった頃の話」，と双方で断りながら，語りの冒頭，そして結末部においてドゥームのエピソードを繰り返した意図（$S_1 < S_2$）は，そのような論理を受け入れざるを得ない語り手のスタンスなのだ。昔と今が意識の中で混濁する，と先に述べたが，それは語る者と語り継ぐ者との間にある論理の齟齬によって生じたと考えていい。そして，物語はそもそも破壊され，消え行くことを宿命とする。美しい物語もやがては消え去る，そのことへの承服しがたい承認を，物語の継承という行為の中で行なわねばならなかった。ならば，語り手にとってドゥームは，部族の中の誰からも愛されたイッケモチュッベの物語を破壊し，死（doom）に追いやる，不吉なものの象徴であり得た，としてもさして不思議ではない。

結　び

この作品全体を通して，もっとも愉快なのはイッケモチュッベとデビッド・ホーガンベックが繰り広げるコンテストである。とりわけ，洞窟の情景は，適当な誇張を交え，いきいきと表現され，作品のハイライト・シーンと

言ってよい。この「話」の部分が印象深く読み手の心に残るのは確かである（もちろんそのような仕掛けになっていることもまた確かである）。二人の繰り広げたコンテストが，トール・テール（a tall tale）の伝統の上にあったことを今一度強調しておきたい。そのもつ意味を，説明的に言えば，基本的には「事実を装った虚構」であり，それが，コミカルに，信じられるか否かのぎりぎりまで誇張され，感性的な真実を明らかにし，恐怖を取り除き，特定集団をとりまとめ，結束させる，ということである[14]。例えば狩りについての冗談（hunting yarns）は，狩の道具，方法のようなことについての共通（有）する知識，あるいは狩についての共通の経験，喜びをもった集団において，冗談は初めて意味をなし，その外部集団にはとんと意味をなさない，ということがある。だから，この「コンテスト」にまつわるトール・テールは，いわば落語の古典のように，だれもが知っている「演物」であり，物語の中の「嘘」は嘘として心地好く受け入れられた。したがって，そういう物語が存在することは，それを享受できる「集団」がいることを示唆している。

民族集団（a folk group）というのは「濃密な関係に基づく集団（a high context group）」であり，「広範で親密な相互の接触（extensive informal communal contacts）」を共有している。また，民族集団は，自己イメジ――とりわけ，他の集団の価値と異なる，あるいは異なっているように思える自らの価値のイメジを共有している人々の集団のことである[15]。このような「集団」理解の立場に立つとき，「笑える」であるとか「話が通じる」などという事柄は，人間の普遍性よりも，人間の個々別々で，特有な結びつきに大きくよりかかっているように思えてならない。

この作品の語り手の語る行為は，まさにそのような共有された「価値イメジ」に根付いた行為である。語り継ぐのは，時空を超えて共に同じ夢を夢見ることを実現するためであり，それが継承ということの本来の意味であった。しかしながら，語り「継ぐ」という行為そのものの中で，語り手が認識したのは，語り継ぐことの不可能性であった。それを，端的に言ってしまえ

ば，ある共有する自己イメジをもつ集団が，やがて消えていく，そのことへの危惧が，語る行為の中心にあったということだ。その意味では語り手は，皮肉にも，「失われ行く世界」を，再＝現前化しようと試みたのである。

〔註〕

1) William Faulkner, *The Collected Stories of William Faulkner* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1989), p.363. 以後この本からの引用はかっこ内の数字によって示される。

2) James B. Carothers, *William Faulkner's Short Stories* (Ann Arbon: Umi Research Press, 1985), p.77. その他 Lewis M. Dabney, *The Indians of Yoknapatawpha: A Study in Literature and History* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1974), p.60. "'A Courtship' is an evocation of radical innocence, projected upon the Indian world before its corruption by the white man's ways." とある。

3) Frank Cantrell, "Faulkner's 'A Courtship'," *Mississippi Quarterly,* 1971, 24: 289–95.

4) Shlomith Rimmon-Kenan, *Narrative Fiction: Contemporary Poetics* (London & New York: Methuen & Co.Ltd, 1983), pp.13–4. Roland Barthes『S/Z』(みすず書房，1973年）には以下のような説明がある。「テキストを読む者は誰でも，諸行動の分類の下に（「プロムナード」，「暗殺」，「逢引」），いくつかの情報を集める。そして，シークエンスを形成するのはこの名前なのである。シークエンスは，それが命名できるときにのみ，またそれを命名できるゆえにのみ存在するのだ。」p.23.

5) Frank Lentricchia & Thomas McLaughlin 編『現代批評理論』(平凡社，1994年）pp.158–59.

6) Gerard Genette『物語のディスクール』(書肆風の薔薇，1985年）には以下のようにある。

「「再　現（ルプレザンタシヨン）」——より正確には物語〔による〕情報〔提供〕——にはいろいろな程度が認められるということだ。物語言説は，より多くのもしくはより少ない詳細を，より直接的もしくはより直接的でない仕方で読み手に提供しうるのであり，かくして物語言説は，自己の物語る対象との間に，より大きなもしくはより小さな距離をおいているように思えるわけだ。」

7) Shlomith Rimmon-Kenan, p.45.

8) Mikhail Bakhtin『言語と文化の記号論』(新時代社，1980年）p.250.

9) Shlomith Rimmon-Kenan, p.111.

10) Mikhail Bakhtin, p.250–51.

11) Shlomith Rimmon-Kenan, p.113–14.

12） Patrick Chamoiseau & Raphael Confiant『クレオールとは何か』（平凡社，1995年），p.13.

13） インディアンによる黒人奴隷の所有に関しては，Lewis M. Dabney, *The Indians of Yoknapatawpha: A Study in Literature and History,* pp.93–4 及び，"Slavery among the Indians," *Southern Literary Messenger,* XXVIII (May 1859), 333 等に言及されている。

14） Carolyn S. Brown, *The Tall Tale in American Folklore and Literature* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1987), p.2.

15） *Ibid.,* p.33.